「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 29 年　　7 月　20 日
所属部局・職	霊長類研究所社会生態分科・修士課程学生
氏　名	石塚真太郎

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

香川県小豆島

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

小豆島実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

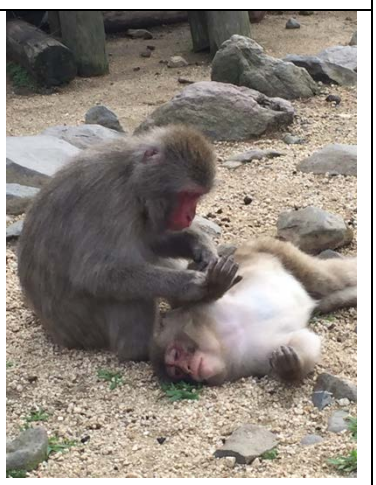
平成 29 年　7 月 5 日　～　平成 29 年 7 月　7 日　（3 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

銚子渓 自然動物園 お猿の国

５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。



小豆島のニホンザル

ニホンザル(*Macaca fuscata*)は順位関係が厳しい社会を構築することで知られている。一方で香川県・小豆島個体群のニホンザルは寛容な社会を持つことで知られている。霊長類の個体間の社会性の違いは、行動、繁殖、生理等、様々な面での違いを引き起こす。社会の異なるニホンザル個体群間を、様々な視点で比較することは、それ等の面での種内多様性を理解することに貢献できると期待できる。本自習は、寛容な社会を持つニホンザルの観察経験を積むことを目的とし、実施された。行程は以下の通りである。

7/5 移動、銚子渓にてサルの観察
7/5 銚子渓にてサルの観察
7/7 小豆島伝統の学習、移動

今回の観察でもった印象としては、小豆島のサルは極めて寛容な社会を持つわけではなく、他の個体群のニホンザルと大きく異なるわけではない。給餌の際、メス間、あるいは異性間の攻撃交渉が何度も観察できた。採食時に攻撃交渉が頻繁に生じる点は、他の個体群と共通している。「小豆島のサルの社会は寛容だ」という固定概念にとらわれず、種の特徴の範疇内にあることを心に留めておく必要があると思う。

一方で寛容性を示唆する行動も観察できた。一つはオス間の攻撃交渉が一度も見られなかった。今回の観察群はオスの数が少ない上、観察期間は交尾期ではなかったものの、観察を続けていけば寛容型社会の特徴を見出せるかもしれない。また、群れの凝集性は高かった。冬になればサル団子も形成されることから、凝集性の高さは間違いないと思う。

これまでの研究の中で、寛容なボノボと専制的なチンパンジーの間で、オスの繁殖成功の偏り(reproductive skew)は同程度か、ボノボの方がやや高いことが明らかになっている。社会が大きく異なるにもかかわらず、繁殖成功の偏りが同程度なのは興味深い。霊長類の社会関係が繁殖結果に与える影響を明らかにする上で、社会の異なるニホンザルの個体群間比較は有効な手だと思う。これからは大型類人猿だけでなく他の霊長類種にも手を広げ、霊長類の繁殖システムを明らかにしていきたい。

６．その他（特記事項など）

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラム、銚子渓自然動物園お猿の国の皆様、引率してくださった渡邊邦夫元教授、本郷峻教務補佐員、および参加者の皆様に感謝申し上げます。